

幼稚園保育所の相違についての回答

内容的に差異がある 37.3%	法的に所管が異なる 2.6%	同じ 5.6%	無答	55.5%
--------------------	-------------------	------------	----	-------

問題	幼稚園と保育所の相違に就て	幼稚園の概念 返答数 (返答率%)	保育所の概念 返答数 (返答率%)
1	小学校の準備教育をすところ	104 (31.2)	0 0
2	働きに行く家庭の子供を預かり遊ばせる	0 0	185 (58.7)
3	年齢的に一定している(幼)	19 (5.7)	25 (7.9)
	一定でない(保)	5 (1.5)	0 0
4	年齢的に保育所の次にすむところ	5 (1.5)	0 0
4	保育時間が短い(幼) 長い(幼)	7 (2.1)	26 (8.2)
5	経済的に金持がいく(幼)	11 (3.3)	12 (3.8)
	貧乏人がいく(保)	1 (0.3)	4 (1.3)
6	教師の責任が重い(幼) かるい(保)	1 (0.3)	4 (1.3)
7	環境設備が整っている(幼)	6 (1.8)	2 (0.6)
	整ってない(保)	6 (1.8)	2 (0.6)
8	保育所より一段すすんだところ	17 (5.1)	0 0
9	集団生活をさせ社会性を養う	59 (17.8)	9 (2.9)
10	情操教育に主眼をおく	12 (3.6)	0 0
11	文字・数・遊戯等の知識を教える	19 (5.7)	2 (0.6)
12	幼児期に必要な心身の成長を助ける	55 (16.5)	21 (6.7)
13	個性教育に主眼をおく	10 (3)	0 0
14	自由にのびのびと遊び家庭的である	0 0	19 (6.1)
15	健康保育に主眼をおく	2 (0.6)	7 (2.2)
16	華美で行きにくい(幼)	6 (1.8)	3 (1)
	気楽に行ける(保)	6 (1.8)	3 (1)

(幼=幼稚園) (保=保育所)

心に優越感あるいは、劣等感をいだかしているのではないかと考えられた。⑩男女での回答差は女に文字を教えること、行事を派手にすること、義務化の要求度が強く年齢差では、P・T・A出席で毎度出席するが二十代で四三%に対し三十代でぐっと減り二五%となり年齢と共に減少していること、学歴差では、文字への要求、どの子も同じく可愛いがって欲しいの要求度が小学卒の人に最高だったこと等が注目された。

以上でわかるようにこれらの回答は地区的にも個人的にも異っていて、これからの状態を知ることによりP・T・Aその他の諸活動でいかに園を正しく理解させ、より教育的な線に高めていくかが問

題とされねばならない。また我が国の保育所・幼稚園のあり方について今後反省されると共に、もっと明瞭に両者の進み方を一般家庭に理解させる必要があるのではないかと考えるものである。

(註1) 日本保育学会第10回発表要旨54、55頁に書いている。

(註2) 紙面の都合で農村幼稚園を農・幼と他区も同様略した。

(註3) 註1と同じ要旨の56頁に対象とした家庭の学歴を書いている。

(註4) 回答についての実数%とは同要旨57頁に記している。

幼稚園保育の効果

愛育研究所 多田淑子

村山貞雄

一、調査の方法

幼稚園保育の結果、どんな効果があるだろうか。

その一つの方法として、幼稚園教諭と母親にそれぞれ担任の幼児と自分の子どもについて、この一年間またはこの二年間に、「幼稚園へいかせた結果、効果のあったと思うこと」について、なるべく具体的に、箇条書きにかいてもらった。

調査の時期は、三月一日から五日までをえらんだ。

調査の対象とした幼稚園児数は、千五百十名であったが、回答がえられた幼児の人数は、母親のほうが一三二名、教師のほうが一三三名であった。

調査校は、都市化の別を考慮して、六大都市、市、町村から、それぞれ三園ずつをとった。

〔表〕 調査幼稚園 名

地域	幼稚園の名称と所在地
六大都市	千代田区神田寺幼稚園 中央区久松幼稚園 港区愛育幼稚園
市	大宮市日進幼稚園 立川市東立川幼稚園 秦野市本町幼稚園
町村	千葉県姉ヶ崎町姉ヶ崎幼稚園 東京都清瀬町清瀬幼稚園 神奈川県大磯町大磯幼稚園

二、よくなったと思われる項目

この調査の結果、母親や教師によって、幼稚園にあげてよくなったと思われる内容として 一、健康な生活 二、健全な生活 三、よい社会生活 四、よい性格 五、健全なものの考えかた 六、知的技能的な能力態度 七、就学への準備 八、通園による効果、に分類した。(発表要旨の表参照)

このうち、一番目の健康な生活とは、身体にかんするものである。この項目では、衛生の観念や食事のよい習慣がついたものと身体が強く元気になったものがめだっている。

二番目の健全な生活とは、一人立ちの生活が健全にやっていける基礎的な能力・態度を意味し、集団生活ということを考えないものである。

その内容として、自立的になり、自分のことは自分でできるようにしたこと、ものを整頓し、たいせつにするようになったこと、生活が時間的に規則正しくなったこと、遊びがよくなったことなどがめだっている。

三番目のよい社会生活は、とくに人と人とのまじわりにあらわれる能力や態度で、実生活での対人的な行動範囲をみようとするも

のである。

この項目にあらわれた保育効果には、集団生活になれ、はにかまずに、思ったことがいえるようになったことや、友だちとよく遊べるようになったことがめだっている。

また母親のばあいは、よい家庭生活ができるようになったという内容が、当然のことではあるが考えられている。

よい社会生活ということは、ふくまれる範囲が非常にひろく、考えようによっては、ほとんどすべての保育効果がこのなかにふくまれる気もしないではない。

したがって、たとえばこのなかから、「よい家庭生活」をとり出して一項目としてもよいであろう。

四番目のよい性格では、とくにどの場合ということではなく、どの場面でもそれがあらわるような、その子の身についた態度や行動などにかんする内容を考えた。

この項目では、あかるくなったり、おちついてきたこと、素直になったことなどがめだっている。

五番目の健全なものの考えかたとは、社会的道徳的に必要な健全なものの考えかたを意味するが、判断力がついたこと、とくに善悪の判断ができるようになったことがめだっている。

しかし、教師のばあいにおいても、また母親のばあいも、このような内容で効果があつたと主張する者は少ない。

六番目の知的技能的な能力態度は、いわゆる学習的な面を意味する。小学校以上の学校では、教育効果について考えるばあい、このような学習面の内容がほとんどであるが、さすがに幼稚園では、その頻数が、母親のほうで三番目、教師のほうで四番目となっている。

この内容における保育効果としては、図画・製作・音楽の面の向

上と、ことばの面の向上がめだっている。また知的にのびたと考える者が少なくない。

七番目の就学への準備は、教師ではそのことについていう母親のほうにしかあらわれなかった。しかも、このなかには、幼稚園を特殊学校への準備校としてやくだつと考える者がかなりあったが、このことは、大きな問題であろう。

八番目の通園からくる効果は、ひとりて通園できるようになったとか、自分の子どもの欠点がはつきりつかめたというように、幼稚園保育の直接の効果というよりも、幼稚園へ通園することによって生じた間接的な効果をふくんでおり、これまでの七つの項目とは性質のちがったものであるといえる。

そのおもな内容は、通園によって道のあるく技術を習得したこと、家庭教育に幼稚園を利用できたこと、家庭生活の欠陥が幼稚園生活でおぎなえたこと、先生というものについた態度をおぼえたこと、子どもが幸福のように思えることなどである。

幼児の発達と保育期間との関係(その一)

姫路工業大学

守屋光雄

釘宮牙子

高橋洋子

「研究の主旨」

I年保育とII年保育に於ける保育期間の長短が、幼児の心身の発

達に、いかなる影響をもたらすであろうか。この点については、従来から、幼児教育の実践的課題として、採りあげられてきたことは多いのであるが、われわれもまた、現場における保育期間の長短が、いわゆる保育効果(経験効果)の優劣を、どのように規定しているかについての実態をさぐり、同時にそれらの資料に基づいた、より効果的な保育形態・内容が、いかなるものであるかについても追求して行きたい。したがって、いわゆる保育効果についても、単なる保育期間のみの問題で終始するわけではなく、諸条件のからみあいの結果としてとらえられなければならないことはもちろんであるが、ここでは、もっぱらI年保育とII年保育の期間の差異のみに限定し、どこまでも実践面とのつながりについて検討して行きたいとおもう。

「研究の方法」

したがって、このような保育期間の差異がもたらす効果の予測とは、厳密な意味においては、入園当初の資料に加えての卒園時測定値が比較されねばならないのであるが、換言すれば、入園時資料からみての卒園時再検査の結果が、どのようであるかについての手続きを経なければ、両者間の比較は極めて巨視的段階にとどまらざるをえないのであるが、今回はこのような方法論上の不備を認めながらも、卒園時のみの資料に基づいたことをお断わりしておく。

対象、姫路市双葉幼稚園、神戸市須磨幼稚園で、人員は両園合計したI年保育児六一名II年保育児五四名(とくに性別を設けず)とし、生活年令は五才〇か月より七才〇か月までとした。主な調査期間は昭和三十二年一月から三月まで。

以上について、I年保育児、II年保育児のグループ別に次の諸テストを施行した。すなわち①R式乳幼児発達検査(京都市児童院標